
「なんか知らんが勇者に選ばれた」

けちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「なんか知らんが勇者に選ばれた」

【Nコード】

N7715Y

【作者名】

けちゃ

【あらすじ】

幸せな家庭のダンスに忍び寄る黒い影！

皮肉にもそいつは勇者だった！

安物装備で旅に出た勇者と仲間達の行く末は・・・？

テキトー勇者と仲間の怠慢冒険！

ボケありツツコミありメタありバトルありラブコメあり（？）

残念系ほのぼの異世界冒険コメディーラブコメファンタジー（ry

ストーリー！

「旅にでるならお金だね」 (前書き)

はじめまして、けちゃといいます。初投稿なので拙い部分もあるかと思いますが、よろしく願います。

「旅にでるならお金だね」

静かで清々しい昼下がり。

「いやー、堂々と民家漁るのはいいもんだねえ。お、旅人の服発見」
無人の家でダンスを開くという勇者らしからぬことしながら俺が言うど、

「勇者さん・・・あんまりそういうこというもんじゃないですよ・・・」

僧侶ちゃんに怒られた。いやあ、怒ってても可愛いなあ僧侶ちゃん。

「ま、貰えるものは貰っておいたほうがいいんじゃない？貢ぎ物だと思って。」

などと地味に腹黒いことを言うのは賢者。おねーさんキャラだが驚くほどつるぺた「消すわよ？」ごめんなさい何も言ってません。

「にしてもお前ら面倒なことしてるなー。ダンスごと持ってけばいいじゃないか」

・・・このガチムチマッチョは戦士。アホ。キング・オブ・アフオ。A・F・O。

・・・いきなり俺が勇者だと告げられ、王様に100Gと銅の剣を貰って旅立ってはや数週間。
勇者の動き（強奪）も様になってきた。
しかしこれから世界救いに行くってヤツに100G＋安物の剣って・・・俺達の国そんなに財政難だったのか・・・。

今は俺達の住んでいた城下町から北東の、小さな村にいる。

「それにしても静かでいい村ですね。自然も綺麗ですし・・・。」

僧侶ちゃんがそんなことを言うと戦士は、

「そうかあ？何もない村だし、早く洞窟の魔物片付けちまおうぜ！」

とか言い出した。この脑筋には自然を楽しむ感性はなかったらしい。

とはいえこの村が魔物に困らされているというのは聞いているので、

「取り敢えず今日はもう日がくれるし、洞窟は明日にしないか？」

とみんなに聞くと、

「いいんじゃない？夜出歩くのは危険だしね。」

と賢者。

「じゃあもう飯が食えるんだな？ヒヤッホウ！」

・
・
・
なんで俺コイツ仲間にしたんだっけ
・
・
・

「旅にでるならお金だね」 (後書き)

まだまだ始まったばかりですが、意見要望質問アドバイス等と嬉しいです！

「裏目に出ることってあるよね」

翌日、俺達は村の近くの森の奥にある洞窟に向かった……のだが。

「迷った……」

森は薄暗く、目印もないのですぐに迷ってしまった。

「しかし勇者が道に迷うなんて珍しいなー！ リンゴも木から落ちるってやつか？」

……戦士のアホが何か言ってるので、ツッコんだら負けかと思いつつも、

「お前はアレか、万有引力でも発見したのかニュートン戦士」

と、きちんとツッコんでやる。

「それを言うならサルですよ戦士さん……」

俺の態度とは逆に、優しく教えてあげる僧侶ちゃん。マジ天使。

「なにはともあれ、早く進まないともまずいんじゃないかしら？」

賢者が話を進めてくれる。確かに出てくる敵は雑魚とはいえ、このままでは消耗してしまう。

「じゃあ、どっちに進む？ 僧侶ちゃん。」

まずは進まないと埒があかないので、俺はひとまず僧侶ちゃんに聞いてみる。

「え？じゃあ東に・・・」

「西か」

「西だな！」

「西ね」

「ええええええ！ひどいです皆さん！何で聞いたんですか！」

僧侶ちゃんの勘が驚くほど当たらないのはここまでの短い旅で嫌というほど思い知った。

「ぐすん・・・皆さんが私のことイジメます・・・」

「ま、方向は決まったし進みましょうか。」

拗ねてる僧侶ちゃんを華麗にスルーして賢者が歩き出したので、俺と戦士も後に続く。

「ふええ・・・おいてかないで下さいいいいいい！」

僧侶ちゃんの指すほうと真逆に歩き続けると、洞窟の入り口が見えてきた。

「ここまで完璧に当たらないなんて・・・流石の俺も目からゴボウだぜ・・・」

「ずいぶん斬新な目をしてるんだなお前は」

僧侶ちゃんが落ち込んでるのでそれを言うならウロコだと正してやる人もいない。

「戦士の中ではことわざがマイブームなのかしらね・・・」

賢者はそう言うが、そうだとしたら迷惑この上ない。ツッコむ方の身にもなってくれよ。

まあそれはおいといて、

「さて、気を取り直してダンジョン攻略といきますか！」

「涙目上目遣いは反則だろう」

「暗いな・・・」

洞窟に入ると、日の光はすぐ届かなくなった。最近までは炭鉱だったらしいのでところどころに松明があって先には進めるが、かなり薄暗い。

「か、かなり暗いわね・・・」

賢者はそういつて俺の服の裾をキュツとつまんでくる。あれ、こいつもしかして・・・

「暗いトコ怖いのか？」

「ばっ、そ、そんなわけじゃない！はぐれると大変だと思っただけよ！」

そういうので賢者の手を離し、サツと離れてみると、

サッ。

ピタッ。

サッ。

ピタッ。

賢者はしっかりくつついてくる。更にからかおうと思ったが、賢者が涙目で見上げてくるのでやめた。賢者にも苦手な物があったとはな・・・

「二人とも、何遊んでんだ？」

戦士が聞いてきたのでなんでもないと答えておく。

「それにしても何か出そうですね・・・」

と、僧侶ちゃんが言う。どうやら僧侶ちゃんも多少怖いらしい。

「や、やめてちょうだい僧侶・・・」

だが賢者の方が重傷のようだ。このままでは女子勢が使い物にならないので俺は、

「大丈夫大丈夫、最初のダンジョンなんてどのRPGでもお試してみたいなもんだし、何も出ないよ。」

と言ってやる。

「RPG？なんだそりゃ？」

俺のメタ発言に首をかしげる戦士。

「そ、そうよね、最初のダンジョンなんてト○ワの森みたいなもんだよね！」

いや、トキ○の森は最初にしては結構むずかったような・・・

まあ効果はあったようなので敵を蹴散らしつつ進むと、光が漏れ出る部屋のようなものがあった。

「ここか・・・」

俺は部屋のドアの隙間から中を伺う。するとそこには？．？．？！

「賢者さんマジばねえっす」

(な、なんかカン○タミたいのいるー！ー！！)

中を覗いた俺は、中にいたヤツに驚愕する。

なんだあの覆面上半身裸男・・・モロにカンダ○じゃねえか・・・みんなカ○ダタわかるかな、ドラ○エ3の。まあわからん人はググってくれ、見た目が一発でわかる。

なにはともあれ、俺は呼吸を整えてみんなのところに戻る。

「ど、どうでした？」

と、僧侶ちゃんが聞いてきたので俺は答える。

「あ、ありのまま見たことを話すぜ・・・扉を開けたと思ったらカンダ○がいた・・・何を言っているのかわからねえt(r y」

かくかくしかじか

「じゃ、そいつをぶっ倒せばいいんだな？単純明快じゃねえか！」

恐らく話を一割程度しか聞いてなかったであろう戦士が言う。

俺は四字熟語が珍しくあってるのに驚きつつも頷く。

「それで、その人(?)はあの部屋にいるんですか？」

僧侶ちゃんが聞いてくる。

「ああ、子分も一緒にいたいだ……ってあれ？賢者は？」

その時、ガラガラガラズドーン！と背後でものすごい音がした。俺は嫌な予感に冷や汗を流しつつも、後ろを振り返る。

するとそこには、もうもうと立ちこめる砂煙の中、瓦礫をまたいでこちらに歩いてくる賢者が。

「え、えと……なに、したんだ？」

俺が恐る恐る聞いてみると賢者は、

「倒すのも面倒だし、洞窟に天井崩して入り口ふさいできたわ。」

な、なんて卑怯な！もしかしたらバトルシーン期待してくれてた人もいるかもしれないのに！

「あーっ！俺が戦いたかったのに！」

張り切っていた戦士が嘆く。

「戦鬪なんてバカのすることよ。生き物を殺す手段なんていくらでもあるわ」

こ、こえええええええ！ やっぱ黒いよこの人！色々と！そして暗いトコから早く出たいだけで絶対！

「さ、みんな行きましょう」

笑顔が怖いです賢者さん。

まあ一応問題は解決したし村に戻る。（帰りは迷わなかった）
すっかりあたりも暗くなっていた。もう今日は休もう・・・

「なんでみんなグー出すかなあ・・・」

翌朝、村長の爺さんのところに報告に行くと、

「ほっほっほ、おぬしらならやってくれると思っと思ったわい」

とか余裕なこと言われた。

なんとなくイラッときたので、俺は爺さんの頭にモンゴリアンチョップを食らわせ、報酬と壺の中身を拝借して家を出る。

今日はこの村で一日休む予定なので、各自思い思いの過ごし方をしている。

ちなみに俺はジャンケンで負けたので村長への報告だ。

俺は特にすることも無いので、みんなの様子でも見に行こう。

道具屋や武具屋が並ぶところに行くと、僧侶ちゃんが薬草を選んでいた。

俺は後ろからそっと声をかけてみる。

「いつもありがとね、僧侶ちゃん」

「ひああっ!?! え、あ、勇者さん、驚かさないでくださいよ!」

どうやらおどかしてしまっただけなので、素直に謝る。

「それにしても珍しいですね、勇者さんも買物ですか?」

「いや、買い物は僧侶ちゃんに任せてるからね、いつもありがとう。」

基本的に俺たちの財布は僧侶ちゃんが握っている。
というか他の三人は稼ぐことはできても管理ができないのだ。

「あ、い、いえ、どういたしましてっ！」

俺がお礼を言うと、何故か赤くなる僧侶ちゃん。・・・そんな要素あったか？

「じゃ、これ以上買い物の邪魔してもあれだし、もう行くね」

俺は手を振って立ち去る。

「あ、全然邪魔とかじゃ・・・」

僧侶ちゃんが何かゴニョゴニョ言っているような気がするが、おそろく気のせいだろう。

さて、一旦宿屋に戻るかな・・・。

「筋肉さんがーむらがーえった、ってか」

俺は村をブラブラしながら宿屋に戻る。

すると宿屋の庭に戦士がいた。

「・・・フッ！フッ！おお、勇者じゃねえか！」

・・・半裸で。

俺は無視を決め込むことにする。こんな半裸男知るものか。

「あ、ちょっと待てよ、どこいくんだ、お前も筋トレしていこうぜ！」

「なんだ、俺はアリの行列を眺めるのに忙しいんだ」

「俺の存在アリ以下！？」

やっぱりほっとくとうるさそうなので相手をしてやろう。

落ち込んで肩を落しながらベンチプレス（110kg）を持ち上げる戦士に俺は尋ねる。

「しかし、こんな量の筋トレグッズ、どうしたんだ？」

戦士の周りにはよくわからない器具が並んでいた。俺にわかるのはダンベルくらいだ。

「ああ、ここの宿屋のご主人が筋トレ好きで意気投合してな、貸してもらったんだ。」

「昨日お前と宿主さんが夜遅くまで二人で飲んだのはそのせいかな・・」

昨日の夜は二人の太い声が宿屋中に響き渡っていた。

「おう、というわけで勇者、お前も筋トレ「断る！」」

こいつの筋トレなんか付き合ったら3日は筋肉痛で動けなくなる。

なんせこいつが片手で何度も持ち上げるダンベルですら、俺は両手と全身を使ってもかすかに浮くだけなのだ。

決して俺が弱いわけではない。むしろ平均よりは上くらいだと思っている。

こいつの筋肉が異常なのだ。

「なんで断るんだよー。筋肉あれば嬉しいなっていうだろ？」

「俺は別に必要以上の筋肉は要らないしお前と違って勇者だから魔法使えるしそもそもそれは備えあれば憂いなしって言ってもはや憂いなしの部分すら変わってるぞとかつつこんだりしてる間に俺はさっさと逃げさせてもらおう、じゃあな」

「お、おう、じゃあなー」

大変な目に遭うところだったぜ。

賢者は宿屋の中かな、
なんとなく。行ってみよう

「ぺったん♪ぺったん♪つるぺったん?」

二つ部屋をとっているうち、女子部屋の方をノックして入ると、賢者はベッドに寝転んで本を読んでいた。

「あら、勇者じゃない。どうしたの?」

賢者は普段着ている装備ではなく、緩めのTシャツとホットパンツのような短いズボンを身につけていた。

なんというか、その・・・かなりセクシーだ。

首もとから覗く白い肌や、スラリと伸びた長い足に、目を奪われてしまう。

「ああ、いや、みんなは何してるのかと思ってさ」

まあつるぺただけだね! うつ伏せで本を読むのに適したつるぺただけd 熱い熱いなんだこの焼けるような感覚は・・・

「勇者、あなた今失礼なこと考えてなかったかしら?」

賢者の手には火の玉が浮いていた。なるほど、それを俺に押し付けていたからこんなに・・・

「って熱いわあああああ! ごめんなさいごめんなさいすいませんもうほんとマジで!」

ああ、全力で謝ったとも。

ていうか人の心読めるのかこいつ・・・

「全く……。結構人が気にしているのに失礼ね」

むう、機嫌を損ねてしまったようだ。ここはフォローしておかないとな。

「まあ、世の中には小さい方が魅力を感じる人もいるらしいし、気にすることないんじゃないか？」

よし、ナイスフォローだ俺！

「そ、そうかしら？あの、べ、別に興味は無いけど、勇者はその・
・どっちが・」

俺が自分のフォローを自画自賛していると、賢者が何かゴニョゴニョ言っていた。

「ん？悪い、もう一回言ってくれるか？」

「な、なんでもないわよ！勇者の馬鹿！」

ボタン！・・・と、追い出されてしまった。

賢者が声を荒げるなんて珍しいし、話を聞いてなかったのは失礼だったなと思う。何を言ってたのかはわからないが、後で謝っておこう。

「さて、皆が集まる時間まで経験値集めでもしますかね、っと。」

「スライムって冷んやりしてて気持ち良いよね」

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

髪から汗が滴り落ちる。

もうかなりの数を倒したはずだ。

「しかしいくら序盤の雑魚モンスターとはいえ、一人で倒し続けるのは無理があったな・・・」

皆のところを回ってから、ずっとモンスターの狩り続けていた。
今は村の近くの岩にもたれて休憩中だ。

時々、暇な時間には俺はこうして経験値稼ぎに出るようにしている。

他の三人よりレベルが低いと示しがつかないし、
俺みたいなのでも勇者は勇者。パーティーの仲間も守れないで勇者
なんてやっていけないのだ。

俺だけレベルが高いのを皆は、

「勇者だけずりーぞ」とか「主人公補正ね」とか言ってくるけど、
実はこうしてコツコツ稼いでいる。

いくら生き返るとはいえ、僧侶ちゃんや賢者を酷い目にあわせるわけにはいかないしな。

・・・戦士？ あいつは筋トレで能力値上がるからいいの。

そうして休んでいると、またプルプルしたモンスターが襲いかかってきた。

俺は鈍く輝く銅の剣を腰から抜きつつ立ち上がる。

「さて、と。もう一踏ん張りしますかね！」

「そうして夜も更けてゆく・・・」

夜。

モンスター狩りを終え、部屋の風呂で汗を流した俺は、皆と集まっていた。

場所は俺の部屋である。

「明日には出発するけど、みんな準備はできてるか？」

全員集まったので俺が聞くと、

「私はそんなに荷物もないし、大丈夫よ」

と賢者が言った。

コイツはとにかくものを持たない。

現地で調達できるものはそうしているし、持っているのは服と小物などだけだろう。

「す、すみません、私はもう少しかかりそうです・・・」

僧侶ちゃんは申し訳なさそうに言う。

まあ女の子だしな。なにかと必要なものも多いのだろう。

そんなことを考えていると、

「・・・なによ、私が女らしくないって言いたいの？」

と賢者が耳打ちしてきた。やはりこいつは俺の心を読めるらしい。

ふわっと香る石鹸のような香りに俺がドキドキしつつ謝っていると、

「俺ももうちょいかかるぜ、宿屋の主人が筋トレグッズを少し譲ってくれるらしいんだ！」

と戦士が言う。あんだけあるのにまだ増えるのか・・・と俺は辟易する。

コイツのカバンは他の人には持てないくらい重いのだ。本人曰く特注のカバンらしい。

「というか、そういう勇者は準備できてるのか？」

ふと思ったように戦士が聞いてくる。

「ああ。俺は要らないものはすぐ売るし、お前と違って整理が上手いからな。」

荷物の整理は勇者の必須スキルだろう。大事などうぐが拾えなかったら大変だ。

「そうか、だから勇者の荷物はいつもロリ整然としてるのかー。」

「それを言うなら理路整然だし、合ってたとしても意味が多少違うぞ」

あと最後がルー〇ア口調になっててロリとかかっているのもムカつく。どうせ伝わらないだろうから言わないけど。

俺の心を読んだのか、賢者だけがくすくす笑っていた。

「勇者さんも終わってるんですか・・・急いで準備しますね！」

戦士に呆れていると、僧侶ちゃんがそんなことを言ってきた。

「いや、出発は明日だから、ゆっくりでいいよ？」

「あ、そうでしたね。いやだ私ったら・・・」

顔を赤くする僧侶ちゃん。いやあ、夜でも可愛いなあ。

「ま、なにはともあれ明日は朝から出発だ、早く寝るようにしろよ。ってことで、お開きだ」

明日はこの村を出て、次の町まで野宿生活だ。しっかり休まないとな。

「神は言っている・・・『筋肉うぜえ』と・・・」

「次に行くのはカナールって町らしいぞ」

地図を見て俺は言う。

村を出て北西に数十分、俺たちはひたすら歩いていた。

「カナールといえば、鉦山があることで発展した町ね」

何かと物知りの賢者がそう教えてくれる。

カナールの鉦山はこの辺りでは一番大きいらしい。

「あつ、そういえば、さっきまでの村の名前、聞いてませんでしたね」

僧侶ちゃんがハッと顔を上げて言うのと、

「ああ、そういやそうだったな」

と俺は答える。

あの村、「ここは〇〇の村だよ!」って言うバイト(時給100G程度)も雇ってなかったしな・・・

名前わかんないと転移呪文で飛んでけないんだよなあ・・・

俺がそんなことを考えていると、

「鉦山があるってことは、当然鍛冶屋もあるんだろ？」

と戦士が言う。あ、そうか。たしかに俺達はほぼ初期装備だし、こ
こらで装備を一新してもいいな。

しかし、こいつもたまにはまともなことを・・・

・・・じゃあ、良い筋トレグッズが買えるじゃないか！」

・・・前言撤回。この筋肉ダルマは役に立たん。

「でもあれよね、鍛冶屋にいったら『そんな装備で大丈夫か？』つ
て言われるような装備してるわよね、私たち」

ああっ！賢者が痛い発言を！そして僧侶ちゃんも戦士も気づいてな
い！

「ま、まあ、なにはともあれ着いてから考えよう。まずはカナール
目指して急ごうぜ」

ひとまず俺は話を戻す。

「そうですね、頑張って歩きましょう！」

ああ、こんなとき僧侶ちゃんマジ天使。もう俺の嫁認定したいわー
・・・と思っていたその時、俺は近くの草むらに気配を感じた。
ガサガサと草が揺れる。どうやら何かがいるようだ。

「皆、魔物だ。・・・来るぞ！！」

皆が草むらに注目したとき、ズアッと黒い影が飛び出してきた！

「賢者さんまじポケ○ン凶鑑」

俺は飛びかかってくる影を横っ飛びに躲す。

影は三匹。振り返って敵を見ると、黒い犬のような魔物が赤い眼でこちらを見て威嚇していた。

「ひあっ！い、犬…ですか？」

まだ魔物にあまり慣れていない僧侶ちゃんは怯えた声を出す。

「正確には犬型の魔物ね。凶暴で、縄張りに入った生き物に襲いかかるわ」

賢者はいつも通りの冷静な口調だ。

俺たちが賢者の解説を聞いていると、

「よっしゃ、筋肉を試す良いチャンスだぜ！いくぞオラァ！」

とか言って、戦士が戦闘に入りやがった。

あいつはどうしていつもいつも・・・！

「待て、一人で行くな！『めいれいさせろ』！」

敵に向かって走り出した戦士に俺がそう言うと、戦士はダッシュをやめて戻ってくる。

勇者だけが使える特権の一つだ。

「だああ！じゃあ早く指示を！」

そうこうしている間に、三匹の魔物は走ってくる。

「わかってる！賢者、牽制！」

「了解。…赤き精霊、具現せよ、炎！」

賢者の手から火の玉が飛ぶ。

賢者の魔法は”色の精霊”を使役した魔法だと聞いた。詳しくは今度聞いておこう。

火の玉は魔物の手前で爆発し、土煙がもうもうと上がる。この隙を狙い、

「戦士、行くぞ！」

俺が合図と同時に敵の方へ走り出すと、戦士もほぼ同時に走り出していた。

「作者がバトル書きたいとか言うから大変だったぜ」

「待ってましたあ！」

そう言って戦士は、巨大な斧を振り上げる。

土煙が消え、敵の姿が見えると、俺たち2人は敵に斬りかかる。

どうやら戦士のほうに二匹いったようで、俺は残りの一匹に横斬りを放つ。

「真っ二つにしてやる！」

しかし剣は空を斬り、後ろに跳んで避けられてしまう。

二回、三回・・・全然当たらない。それどころかこちらの体力が削られていく。

速い動きの敵には、確実に攻撃を当てなければ・・・

「まだまだア！」

素早く剣を引いた俺は、踏み込んで突きを繰り出す。

魔物は当然横に躲し、飛びかかるために脚に力を込める。

その一瞬を、俺は見逃さない。

手首を返し、突き出した剣で魔物を斬りつける。

傷はさほど深くないが、動きは止めたはずだ。

「今だ、賢者！」

俺が合図するより早く、賢者のほうから火の玉が飛んでくる。
俺と戦士が戦っている間、長い詠唱の魔法を唱えてもらっていた。
その結果、威力の高い魔法が飛んできたのだ。

「ナイス賢者！」

「当然ね。私を誰だと思ってるの？」

魔物は消し炭となっている。賢者のレベルでこの威力・・・恐れ入るね。

・・・っと、こう呑気に話してはいられないな。
俺が戦士の方を見ると、相手は瀕死なもの、戦士も二匹に挟まれて傷だらけだった。

「素早い敵は向いてないしな・・・僧侶ちゃん、戦士に回復を！」

「はい！・・・女神の加護を！」

僧侶ちゃんがそう言って戦士の方に手をかざすと、戦士の傷はみるみるふさがる。

僧侶ちゃんの魔法は・・・体内で魔力を変換する、とかだっけな。

「よっしゃ！勇者、こっち寄せろ！」

「OK。おらよっ！」

俺はわざと剣を大振りして二匹を剣士の前の一箇所へ集める。

「ふ、ん。ぬああああっ!!」

獲物が自分の前に来た戦士はそんな雄叫びをあげると、両手に持った巨大な斧を横に薙いだ。

斧がモロに当たった二匹の魔物の身体は、数メートル吹き飛んで動かなくなった。

「Lv上げてめんどいよね」

「・・・よし。みんな、戦闘終了だ!」

俺が敵を倒したという合図を出す、

テレテテッテッテッテ

お馴染みのファンファーレが響く。

「ん?なんだこの音?」

戦士が首を傾げる。某RPGのLvアップ音なんだけど、どうせメタ発言は通じないから黙っておこう。

「まあ気にするなよ。お前の筋肉で倒した、それでいいじゃないか」

「勇者、わかってるじゃねえか!そうだな、俺の筋肉が倒したんだもんな!」

あ、いいのかそんなん。

こいつ筋肉が関わってたらどんな詐欺でも引っかかるぞ絶対。

「さて、じゃあまた進みましょうか」

戦闘後の空気を賢者が入れ替えてくれる。

「あ、その前に、皆さん戦闘で疲れてませんか?なんなら回復しま

すけど・・・」

僧侶ちゃんが気遣ってくれる。

まあ特に大きなダメージもなかったので、

「いや、大丈夫。ありがとね僧侶ちゃん」

「でも、私、戦闘で全然役に立てなくて・・・」

俺が気遣いに礼を言うと、僧侶ちゃんは恐縮したように俯く。

「何言ってる、僧侶ちゃんがないとみんな傷だらけなわけだし、もっと自信持ちなよ」

俺はそう言って僧侶ちゃんの頭をポンポンと撫でる。

「あう・・・」

「・・・」

僧侶ちゃんの髪感触を楽しんでいると、何やら横にいた賢者がジトーツとした眼でこちらを見ってくる。

あ、いきなり撫でるのは失礼だったのかもな。

そう思って僧侶ちゃんの頭から手を離す。

「あっ・・・」

僧侶ちゃんが小さく声を上げていたが、なんでだろうか？

「・・・勇者って、素でやってるから恐ろしいわよね・・・」

「ん？何がだ？」

「なんでもないわよ」

賢者の視線がさつきから冷たい。俺、なんかしたかなあ・・・。

「足が棒になるとはよく言ったもんだね」

「おいお前ら、おしゃべりしないで早く行こうぜ。タイムウイズマナーだぞ！」

戦士に急かされる。

・・・あ、アレ、突っ込まないとダメ？

「戦士さん、それだと時間とお金が一緒になっちゃいますよ」

あ、僧侶ちゃん偉い。

きちんと突っ込んでる。

「まあそうだな、先を目指すとするか」

カナルルまでは、あと二日ほど歩いたところにある。

残念ながら、my馬車なんて高価なものも無いし、ラー○アやレ○イスのようなものもない。

「それにしても、長い道のりですよね・・・」

歩き始めて30分ほど。

僧侶ちゃんは早くもお疲れムードのようだ。

「まあまあ、早く宿屋のベッドで寝たいでしょ？休まず歩かないとベッドが遠いわよ？」

「はいゝ・・・」

賢者が僧侶ちゃんを励ます様子は微笑ましく、まるで二人は姉妹のようだった。

「・・・勇者、何二人のこと見てニヤニヤしてんだ？キモいぞ？」

戦士に言われて我に返る。

「え、ウソ、俺そんな顔してた？」

「してたしてた。にへらーって」

「マジかよ・・・」

まあ見られたのが戦士ならまだセーフだろう。

俺たちはまだまだ歩いて行く。

「外でのご飯はテンションあがるよね」

「さて、今日はこの辺で休むか」

カナルまでの道を歩き続けて数刻。日も傾きかけてきたので、適当な場所で休むことにする。

「はふう……疲れました……」

「ふふっ、僧侶、お疲れ様。」

疲れきった僧侶ちゃんを賢者が撫でてやる。俺でも疲れる道のりだったのに、疲れを見せない賢者はすごいと思う。

「勇者、さっさとテント張っちゃおうぜ！」

既にテントを取り出していた戦士が言う。

テントと言っても木に結ぶ簡単な屋根のようなものだ。

俺は返事をして、戦士と整備されていない道の脇、木の並ぶところにテントを立てる。

女子用と男子用がちゃんとあるので、ドキドキイベントは残念ながら発生しない仕様になっている。

「あ、お二人とも、ありがとうございます」

僧侶ちゃんがお礼を言うてくる。

「どういたしまして。さて、夜ご飯の準備でもしようか」

分担をして晩飯の支度を終えた頃には、すっかり日も沈んでいた。

「くうーっ！ やっぱ疲れてるときの飯は最高だぜ！」

戦士は魔物の丸焼きにかぶりつきながそんなことを言う。

「あしたも歩きっぱなしだからな、みんな好き嫌いせずにしっかり食えよー」

栄養補給のことも考え俺が言うと、僧侶ちゃんがピクツと体を震わせた。

ふと見ると、僧侶ちゃんの皿には残された山菜。

・・・賢者の眼がキラリと光る！

「魔物の肉も案外いけるよ」

「僧侶？これは何かしら・・・？」

賢者は僧侶ちゃんの皿の山菜を箸で掴んで言う

「あ、あのこれはそうじゃなくてですね・・・」

たじろぐ僧侶ちゃん。どうも山菜は苦手らしい。
賢者の顔には意地の悪い笑みが浮かんでいる。

「あら、好き嫌いしてたら明日も歩けないわよ？」

そう言って賢者は僧侶ちゃんの口元に山菜を近づける。
顔を背ける僧侶ちゃん。

「い、いやですう・・・」

「そんなこと言わないの。さあ食べなさい？ほら！ほら！」

「い、いやぁ・・・」

いくら僧侶ちゃんが顔を背けても、賢者は山菜を口元から離さない。
なんかイケナイことしてるみたいなムードだ。やっぱりSだなあ賢者・・・

「う、うううう・・・」

・・・僧侶ちゃんが泣きそうな顔をしている。
流石に可哀想になってきたし、助けるとするか。

俺は身を乗りだして、その山菜を口に入れる。
パクッ、と俺が山菜を食べた瞬間、僧侶ちゃんがホッと安堵の表情
を見せる。

賢者の楽しみを奪っちゃったかな。

・・・そう思って賢者の方を見ると、なにか様子がおかしい。

「は、箸・・・私の・・・つ、つつつつまりその、ゆ、勇者と、か、
・・・間接・・・」

何やら顔を真っ赤にして口をパクパクしている。

何言ってるかは知らないが、そんなに僧侶ちゃん虐められなくてシ
ョックだったのか、それは悪いことをしたな・・・

「悪いな、賢者」

「ふえ！？ あ、ああ、べ、別に、イヤってわけじゃ・・・」

まるで僧侶ちゃんのような声をあげる賢者。いったいどうしたんだ
ろう？

「グーパーとは、3人以上の人間を2組のチームに分（ry）」

賢者が落ち着くのを待ち、食事の片付けをしていると、すっかり日も沈んで辺りは暗くなっていた。

俺たちは寝る準備を始める。

「よし、見張り決めるかー」

魔物は夜に凶暴化する習性があるので、夜に外で寝るのはとても危険だ。

なので見張りを交代でやるのが普通なのだが、1人じゃ暇だし、確実に見張りをするために2人ペアで見張りをすることにする。

あとは1人ずつ交代していけばいい。

「「「グーちーグーちーあったっち!」「」」」

俺たちはグーチーでペアを決める。（どうやら地方によって掛け声が違い、グッパーだったりもするらしい。俺たちの住んでいた地域ではグーチーだ。）

最初は戦士と僧侶ちゃんが見張りをする事になった。俺と賢者はそれぞれテントへ行き、毛布にくるまって寝ることにする。

・・・ま、すぐ起こされるんだけどね。

俺の意識はつかの間の夢の中へと落ちて行く・・・

「夜に目覚めると変な感覚になるよね」

「勇者さん、起きてください、勇者さん」

「ん・・・？」

目を覚ますと、上から僧侶ちゃんが覗き込んでいた。眼福眼福・・・じゃねえや、見張りしなきゃ。

僧侶ちゃんの起こし方は、まるでこの旅に出た日の朝、母に起こされた時のようだった。

「ふふっ、勇者さん、寝癖ついてますよ？」

僧侶ちゃんは微笑みながら俺の髪を指差す。

自分で触ってみると、後ろ髪が跳ね上がっていた。

「じゃ、見張り頑張ってくださいね」

そう言って僧侶ちゃんはテントに戻って行く。

さて、見張りするか・・・

まだ外は真っ暗だ。

数時間前に料理を作った焚き火のそばに、戦士が座っていた。

・・・いや、座ってない。戦士の腰の下にはなにもないのだ。

「お、来たか勇者！お前もどうだ？」

「・・・何がどうだ。まさかその空気イスを、じゃないだろうな」

「何言ってるんだ、お前にはこんなことやらせねえよ」

おお良かった、あんなことやってたら・・・というか壁もなしに90°とかどうなってやがる。

しかし戦士も人に筋トレ強要しなくなったな・・・

「ちゃんとお前専用の筋トレメニューがあるって!」

「oh・・・」

どうやら俺の予想の斜め上だったらしい。

「お? 俺の準備の良さに感嘆してるのか? 俺ってば準備短パンにしてあったもんな!」

それを言うなら準備万端だ・・・まあ短パンで筋トレをするならあつてるのかもしれないが。

「ほら、まずは片腕立てと腹筋、スクワットを各250回な!」

「ちょっと待て、それ本当に俺用メニューか!?」

「そうだぞ? 現に俺の1/4しかないし。」

なんということでしょう! (ビフォーア○ター風に)

戦士は、いつも1000回やっているといるというではありませんか! (ビフォーアフター風に)

「え、遠慮しとこう、自分のに集中してくれ。」

「なんだ、わかったよ」

そう言ってダンベルを上げ下げする戦士。

筋トレする戦士の規則的な息の音を聞きながら、見張りの時間は過ぎて行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7715y/>

「なんか知らんが勇者に選ばれた」

2011年12月24日00時52分発行